アフガニスタンの人々とともに18年

医師　中村 哲さんの講演会から

11月17日に法政大学で開かれた講演会での中村哲さんのお話をまとめました。スライドを使いながらの中村さんのお話は、大変わかりやすく、真実が伝わってきました。講演会を企画された実行委員会の学生の皆さんに感謝します。（文責・事務局）

■どんな「国」なのか

私たちペシャワール会は、アフガニスタンとパキスタンの国境の町・ペシャワールに拠点を置き、アフガニスタン国内に8つ、パキスタン国内に２つの診療所を持っています。活動を始めて18年になりますが、日本国内には会員が4000人おり、その人たちの物心両面にわたる支援によって活動が成り立っています。

ペシャワールはパキスタン領内にありますが、歴史的経緯や民族・文化を考えるとそこはアフガニスタンと言えます。西日本と同じ緯度にありますが、寒暖の差が激しい乾燥地帯で、現地で「今日はいいお天気ですね」というのは雨が降る日を言います。

アフガニスタンは山の国です。面積は日本の約1.6倍ですが、その大半はヒンドゥークシュ山脈で、4000から6000㍍の美しい山々が続きます。距離感覚も日本と全く違います。馬に乗って、歩いて、片道一週間はあたりまえ。距離を表すのに「歩いて何日」と言います。

アフガニスタンの人々の99.9%がイスラム教です。おそらく、世界でもっとも古典的なイスラム社会です。権力の最小単位はモスク（イスラム寺院）を中心とするジルガ（長老会）で、日本で言えば「隣組」が大きくなって権力を持ったようなもので、私たちが想像するような国民国家とは違います。

犯罪は警察が取り締まるわけではありません。犯罪者に対して、そこの住民がみんなで掟にしたがって裁く。婦女暴行犯はみんなで処刑する。昔から続いた掟を規範とし、小さなコミュニティーが集まってできあがっているのがアフガニスタンです。

このようなところで医療を行うので、患者がどのようなことで喜ぶのか、どのようなことで怒り悲しむのかを知る必要がありました。そのために大変な時間が必要でした。

アフガニスタンは、貧しい者はどこまでも貧しいという社会です。私どもの病院で働く現地の人の給料が日本円にして一月3000円です。物価水準が違いますから単純に比較できませんが、数百円のお金がなくて死んでいく人は数知れません。ですからいかに少ないお金で、いかに多くの人に医療を提供するかを考えざるを得ませんでした。

■文化や慣習に善悪はない

医療活動を行うために、現地の文化をいかに理解するかが大きなテーマでした。アフガニスタンでは主なものだけでも4つの言語があります。また、私たちにとって大きな壁であった、女性隔離という風習があります。ハンセン病は皮膚に症状が現れるので、どうしても肌を見る必要がありました。しかし男の医者がそんなことをすれば、殺されてもおかしくはありませんでした。

外国人の犯しやすい間違いの一つに、「アフガニスタンは女性を差別している」というのがあります。ある人権活動家がこの問題を告発して、国際会議で喝采を浴びた。しかし私たちに言わせれば、あなた達の思想が満足されればそれでよかろうが、患者たちをどうしてくれるのか。後に残って患者たちのケアをしなければならないのは、私たちであり患者の家族なんです。

私たちはいろいろな制約の中で暮らしている。日本人であるという制約、男であるという制約、学生であるという制約、仕送りが少ないという制約、なによりも限られた命という制約の中で、最大限しあわせに生きていく道は何かを探っていくのが、人間の基本的な作業ではないでしょうか。地方の文化や慣習については、良い悪いのカテゴリーで判断できるもの

ではない。それはそれとして受け入れていくべきです。

■戦火をくぐって現地調査

1979年12月、10万のソ連軍が、時の共産政権を擁護するという名目で侵攻しました。おもに農村が戦場となりました。

私たちは、方針の大転換を決断しました。一つは、ハンセン病だけを診ているのでは医療が成り立たない。他の感染病患者の方が多く、医療施設のまったくない地域がほとんどでした。ですから、多くの無医地区に医療施設をつくるために、本格的に現地調査を開始しました。

しかし現地は戦争状態で、調査は簡単には進みませんでした。当時、マスコミで「ソ連軍･政府軍vs反政府ゲリラ」と報道されていましたが、反政府ゲリラ組織という実体はありませんでした。実際に戦っていたのは、そのへんのおじさんやおにいさん、彼らが村に残って頑強な抵抗を続けていたのです。その人たちは普通の農民で、兵農分離以前の状態なので男たちは武器を持って戦い、女性や子どもたちは比較的安全な難民キャンプに避難していました。私たちは、戦火をかいくぐりながら、いったい人口はどれくらいなのか、どこに造ればよいのかなどを調査していきました。

アフガニスタンの山の中に行くと、外国人を初めて見るという人はまれではなく、「ドクターはフランス人ですか」と聞かれ（笑）「日本人だ」と答えるところっと態度が変わります。それほど親日

的なんです。アフガニスタンの歴史から欧米人に対しては敵愾心が強いが、日本人に対しては親近感を持っています。日本に対する認識は、日露戦争とヒロシマ・ナガサキです。

■人の命は本当に平等か

1988年2月、ソ連軍が撤退しました。いま盛んに「アフガン難民支援」と言われていますが、過去の教訓をぜひ皆さんにお伝えしたい。ソ連軍が撤退して、難民が帰ることになるから、復興支援をしようと300もの団体が世界中からアフガニスタンに押し寄せてきました。また、あらゆるプロジェクトが組まれ、200億ドルものお金が使われましたが、どれ一つとして成功しませんでした。これらのプロジェクトによって帰った難民は一人もいなかったといえます。

内戦が強まり、そのうちに湾岸戦争が始まりました。イスラム教に恐怖心を持つ欧米人は真っ先に逃げました。事実上、ここで難民支援ラッシュは消滅しました。

そのうちアフガニスタンの共産政権も倒れ、全国に散っていた武装グループがカブールに集結し始めました。外国人が引き上げた1992年5月から12月までのわずか7ヶ月間に、パキスタンに270万人いた難民のうち200万人が自力で帰りました。あの「難民支援」騒ぎはなんだったのでしょうか。

自分の家に帰った難民たちを迎えたのは、破壊された家、荒れ果てた農地でした。まず食料の確保が先決でした。私たちは、農業の復興を側面から支援することに全力をあげました。

翌年の93年に、悪性マラリアが大流行しました。診療所で次々と人が亡くなっていきました。農業復興に打撃的です。私たちも必死で医療活動を行いましたが、一日で300人程度の診療しかできませんでした。「すみませんが明日来て下さい」と言わざるを得なかった。不安に陥った農民たちは診療所に投石をし、銃撃し、ロケット砲まで撃ち込んできました。機関銃で私たちの診療所の準職員が二人殉職しました。

その時、私も含めて職員18名は、診療所の中でじっとしていました。二人殺されたので、同等の仕返しをするのがこの社会です。しかし私は「たとえ皆殺しにされても発砲するな。われわれ18名がここで死んだとしても、ペシャワールに数十名が控えているじゃないか。まだ計画は続けられる。そのことで何千人何万人助かるかを考えてみろ」と言いました。

その後、ペシャワールに戻って日本の本部に電話して「ありったけの金を送れ」と伝えました。「先生、30万円しかありません」。「30万円でいいからすぐ送れ」と言ってぞっとしました。この30万円でいったい何人の人が助かるか、と。当時、悪性マラリアに効く薬は一人分220円。人の命は本当に平等なのかと思いました。

■大干ばつとのたたかい

アフガニスタンを訪れてから15年が経ち、長期の取り組みを考えました。ペシャワール会の会員の力で7000万円が集まり、それで病院を建てました。

ナジブラ政権が倒れ、北部同盟がカブールに入った後は、内戦が農村から都市に移り、市街戦は毎日続き、婦女暴行、強盗などは日常茶飯事でした。92年5月から96年のあいだにカブール市民5万人が殺されました。

その北部同盟を追い出して入ってきたのがタリバンです。タリバンに対しては様々な議論がありますが、市民にとって、タリバン政権になってほっとしたのは確かでした。タリバンが支配していたここ数年は、おそらく世界でもっとも治安の良い国でした。爆撃があるまで、市民はつかの間の平和を楽しんでいたわけです。

しかしここ2～3年、干ばつが襲ってきました。アフガニスタンを中心に中央アジア全域がそうで、あわせて6000万人が被災し、最も被害の大きいのがアフガニスタンで、1200万人が被災し、400万人が飢餓線上にいるといわれます。昨年の春に「ここ一年間で100万人が餓死するだろう」と発表されましたが、決して誇張された数字ではありません。

アフガニスタンの雪山が減り、川の水が干上がり、農業用水が確保できなくなっています。飲み水もありません。飲み水がなくなると、村人は村を引き払うのです。家畜が死んでは農業が成り立ちませんから。

私たちの診療所でも次々と幼い子どもたちが死んでいきました。一番多かったのは赤痢です。清潔な飲み水がないから、子どもから犠牲になるのです。

私たちは、病気どころではない、病気は後で治せるから、まず清潔な水を確保することだ、井戸を掘ることだと判断しました。今年の9月9日の時点で、私たちは660ヶ所の作業地を持っています。そのうち水源が出たのは500ヶ所余り。約30万人の難民が命をつなぎ止めることができます。また、30ヶ所の農業用水路（カレーズ）を確保しました。

私たちは、こんな大干ばつで世界が放置することはあり得ないと思っていました。ところがやってきたのは国連による制裁でした。続々と国連団体、外国団体が撤退していきました。首都のカブールまでもが赤十字病院だけの、事実上の無医地区となってしまいました。それで、私たちは今年の3月に5ヶ所の診療所を急設して活動しました。

■空爆と北部同盟支配の中で

米軍による空爆が始まり、アフガン市民はなぜ自分たちが攻撃されるのだと怒りました。カブール市内でも1割の人々が餓死線上にいて、この冬を生きて越せない人々が市内だけで10数万人はいます。私たちは急きょ、市内に食料を運ぶ活動を始めました。

私たちは「カブール陥落」間際まで食糧配給の活動を行っていました。私たちの事務所の2㌔先に爆撃がありました。虐殺される危険があると判断し、スタッフをペシャワールに呼び戻しました。戻ってきた30人のスタッフの報告によれば、ペルシャ語を話せる人は殺されなかったが、パシュトゥー語しか話せない人はタリバンの協力者とみなされ次々と殺されていったということです。彼らが見ただけで数千名の死体が路上に並んでいた、頭に釘を打ち込まれた首の山があったそうです。

こういう現実は報道されず、「北部同

次頁へ

◆訂正とお詫び：前号4～5頁の土本典昭さんの文中、「菩捨」とあるのは「**喜捨**」の間違いです。お詫びし訂正します。ラマダンは「空腹の折りに共同体内の貧者の境遇を想え」という喜捨の精神で行われています。

盟の進入に喜ぶ市民」の姿が流されます。ほんとうにおかしい。日本の人々は、真実を知っているのか、その上で判断しているのかと、思うのです。

私は、こうした活動を続けてきて、アフガニスタンの人々に何かを与えることで、こちらが受け取るものの方が大きかったのではなかったかと思います。日本や世界が同じシステムで動いている中で、人間として何を失っているか、何を失ってはならないかを考えることができたと思います。（これ以降、１時間にわたる質疑応答が行われました。たいへん重要なお話が続きましたが、部分的紹介しかできないことをご了承下さい）

■市民に歓迎されたタリバン

質問：「タリバン政権時はつかの間の平和だった」という話をもう少し詳しく。

9月11日の事件以降、正義の味方＝米国、悪の権化＝タリバンという図式で、タリバンのすることはみな悪いと報道されてきました。北部同盟によるカブール「解放」で、市民はにこやかに振るまい、ひげを剃り、町には野菜や食べ物があふれ…という映像がテレビで流されていましたが、あれには驚きました。

たしかにタリバンによる宗教的規制は強かったのですが、それによって市民がおびえて生活していたわけではない。

北部同盟の旗を振る姿も映されていましたが、市民は両方の旗を持っているんですよ。略奪から逃れるための知恵です。

同じ映像でも、解説の仕方でずいぶん違ったものになってしまう。恐ろしいと思いました。統制された報道に不気味なものを感じます。

アフガニスタンの人々が望んでいたのは、「誰でもいいから、私たちの生命を保障してくれ」ということだと思います。その要求を実現していたのはタリバンだった、だから歓迎されたのでしょう。

■今の世界は長く続かない

質問：アメリカの攻撃の本当の目的は？

さきほど私は「人の命は本当に平等か」と言いましたが、平等ではないんです。日本政府は軍隊を動かし始めましたが、たいへんなことです。

アメリカがやられたのは金融資本の象徴である貿易センタービルです。金融資本は無限大に自己増殖していかないと生きていけません。金が金を生むというのはフィクションです。「消費の生産」をくり返さないと経済が成り立たない時期に入っているのです。その経済の象徴がやられたのですから、アメリカの怒りは国民が犠牲になったことにとどまらず、世界の金融資本の危機的怒りの噴出なのでしょう。あれだけ貧しい国に対して、なぜ超大国がよってたかって攻撃するのか。本質的理由はそこにあるのではないかと思います。

はっきり言えるのは、いま起こっていることは「終わりの時代の始まり」です。アフガニスタンで起こっていることは、形を変えて日本にも起こる。ニューヨークで起きたことは、形を変えて日本でも起きるでしょう。

皆さんにお願いしたいのは、世の中のこと、報道されていること、本当かな？と疑問を持ってほしい。使って捨てて、地球を壊して暖めて、戦争を続けて、今の社会システムはそう長くは続きません。これからどうするか、皆さんも考えてほしいと思います。

●中村哲さん：1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。現在ＰＭＳ院長。ペシャワール会の連絡先：〒810-0041福岡市中央区大名1-10-25上村第二ビル307
tel092-731-2372 fax092-725-3440